

魚玄機詩に見られる「風月満庭」
—その成立について—

The Expression 'Fengyue Manting' in the Poetry of Yu Xuanji: On its Formation

王 若 冲
Wang Ruochong

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第59号 2025年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.59 2025

魚玄機詩に見られる「風月満庭」 —その成立について—

王 若 冲*

目次

はじめに

1. 魚玄機「秋怨」（22）の解釈
2. 古典詩に見られる「風月」と「満庭」
3. 古典詩における「月満庭」
4. 古典詩に見られる「風」「月」「満」「場所」を用いる表現
5. 魚玄機の「風月満庭」の斬新さ
6. 魚玄機以降の「風月満庭」と関連する表現

おわりに

参考文献

はじめに

晩唐の魚玄機が好んだ詩の題材として、月が挙げられる。彼女の全50首の詩のうち、「月」という字は19回使用されている。そのうち時間の表現などを除外すると、天体としての月を描写しているのは16箇所になる。

同時代の他の女性詩人との比較では、以下のような結果となる。

薛濤の77首の詩の中では14首に月が詠じられており、その割合は約18%である。李冶は17首の詩の中で4首に月を詠み、その割合は約24%である。花蕊夫人徐氏は158首の詩の中で16首に月を詠み、その割合は約10%である。魚玄機は50首の詩の中で16首に月を詠み、その割合は32%に達する。

この結果から、魚玄機が月を詠ずる割合は他の女性詩人よりも高く、彼女にとって月は重要な題材であったと言えるだろう。また、彼女が月を詠じる詩には、独創的な表現がしばしば見られるが、魚玄機の詩における月に関する先行研究は見当たらないようである。

そこで、筆者はこれまで、魚玄機の月にまつわる詩語について研究を進めてきたが、今回は例1

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科・博士後期課程修了

「秋怨」(22)¹に見られる「風月滿庭」という表現をとりあげたい。

自嘆多情是足愁 自ら嘆ず 多情は是れ足愁なるを
況當風月滿庭秋 況んや 風月滿庭の秋に 當たるをや
洞房偏與更聲近 洞房 偏へに 更聲と近し
夜夜燈前欲白頭 夜夜 燈前に 白頭ならんと欲す

魚玄機詩の参考文献²では、この詩の現代中国語訳や日本語訳が行われているが、詩語の使用法に関しての詳細な分析は含まれていない。さらに、他の研究³においても、詩的表現の点についてはあまり触れられていない。

この詩の中の「風月滿庭」は、魚玄機が初めて用いた表現と考えられるが、彼女は以前のどのような表現に基づいてこの表現を工夫したのか、またこの表現はどのように後世に受け継がれていったのか。

本稿では、「風月滿庭」に関連する前の時代と同時代の詩詞における用例を検討して、この表現が生み出された経緯について考察し、さらにこの表現が後の時代の詩詞に与えた影響について論じてみたい。

1. 魚玄機「秋怨」(22)の解釈

魚玄機の詩における「風月滿庭」の用法を検証する前に、まずは詩全体の意味について解釈する必要がある。この詩に関しては、起句の切り方や、「多情」「風月」「洞房」「更聲」といった語句の意味に注釈書の議論が集中している。したがって、この節ではこれらの解釈を中心に考察を進めていく。

なお、起句の「是」の意味について、陈文华校注『唐女诗人集三种』（上海古籍出版社、1984）には、「是足愁:即甚足愁。是、与甚同、以音近而假用之。」（引用者訳:「是足愁」は、すなわち「甚足愁」である。「是」は「甚」と同じで、音が近いことをもってこれを仮用する。）とあるが、いず

¹ 本稿では、魚玄機の詩は南宋陳氏書棚本（中国の国家図書館に保存される）『唐女郎魚玄機詩』49首と『文苑英華』の1首をテキストとした。『全唐詩』を参考しながら、このテキストに筆者が50首の通し番号を付けて、「秋怨」(22)のように表記する。唐詩は『全唐詩』により、巻数を記す。宋代以降の詩はそれぞれの詩集を参照し、巻数を記す。「秋怨」(22)の訓読は、辛島曉著『漢詩大系15 魚玄機・薛濤』（集英社、1964）を参考する。

² 辛島曉『漢詩大系15 魚玄機・薛濤』（集英社、1964）、陈文华校注『唐女诗人集三种』（上海古籍出版社、1984）、彭志宪・张焱著『鱼玄机诗编年译注』（新疆大学出版社、1994）、吴柯・吴维杰补注『李冶・薛涛・鱼玄机诗集』（中国书店、2017）等を採用している。

³ 例えば、李晓培の『唐代入道女性世界中的性别意识与情欲』（唐代の出家女性の世界における性別意識と情欲）（山西教育出版社、2011）第二章「女冠和文士共谱的恋曲」（女冠と文士が共に紡ぐ恋歌）で、この詩について言及されているが、彼女が自らの恋愛感情を露わにしたという観点からの評価がなされるのみで、詩語の分析は行われていない。

れにせよ「とても人に愁いを与える」意味で、詩の内容に実質的な影響を与えないので、この点についてはこれ以上は言及しない。

1. 1. 「多情」

起句の断句に関する研究者間の見解は大きく二つに分けられる。例えば、辛島驍は「自ら嘆ず多情は是れ足愁なるを」と句を切っており、彭も同様の切り方で解釈している。これらは二字＋五字の断句方式に該当する。一方、吴柯等は「自叹多情的人，本来就有太多哀愁」（多情を嘆く人は、本来から悲しみが多すぎる）と翻訳しており、これは「自ら多情を嘆ずるは 是れ足愁」という四字＋三字の断句方式に当たる。そこで本節では、「多情」という詩語の意味を考察し、より妥当な断句方式を明確にすることを目指す。

中国の古典詩に出てくる「多情」という言葉に関する論文は、筆者の調べた範囲では三編の論文があった。⁴

そのうち、櫻田芳樹は、唐以前の「多情」について、「多情」と人の感情の関係について、主に二つの要点があることを指摘する。第一に、「多情」の発生は「春情」と関連があり、男女の恋愛に関連していると解され、第二に、「多情」は中唐の時期に様々な場面で用いられ始めるとする。

そして、中唐時代の「多情」に関して、「白居易の『多情』は、賞春（春愁）の風流をいう『多情』を核とするが、傷心を契機として、感情一般へ拡大する相が見えている。」と指摘し、さらに、晩唐になると、「多情」の意味が変わり、「晩唐の『多情』は杜牧に見るように艶情としてのそれと、風流傷心の『多情』に特色があって、それは白居易の賞春など較べて、艶情と傷心をより色濃くしたものである。」と述べている。

魚玄機の「多情」は、櫻田の指摘する中晩唐以降定着した「多情」の用法と一致していると考えられる。晩唐時代の「多情」の概念は、男女の情愛や感傷を喚起する側面を有していた。したがって、この起句は「男女間の恋愛において、多情とは非常に悲しい事象である。そのため、詩人は思わずため息をついてしまう」という主旨を持っていると考えられる。

すなわち、魚玄機の詩の起句は、二字＋五字の断句方式で読むべきであり、「多情は人に愁いを与えることを自ら嘆いている」と詠っていると思われる。

⁴ 鈴木修次の『人生有情－警策のことば』（東京書籍、1977）では、「有情・無情・多情」の節で、「『多情』への興味とあこがれが、盛唐の詩人に示されず、中唐の詩人たち、すなわち九世紀にはいつて活躍する詩人たちにおいて、にわかに共通の関心になったらしいことは、注意を要する。」と述べている。この論述に基づいて、櫻田芳樹は、「『情』の語義の展開と詩語「多情」の成立について」（『北陸大学紀要』、1999）と、後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ－唐詩を読むために』（東方書店、2000）の「多情」という二編の論文を書いている。両編はほぼ同じ内容であるから、ここでは前者に基づいてまとめることにする。

1. 2. 「風月」

承句の「風月」には以下のような意味がある。①清らかな風と月、自然の美しい景色。②風流、風雅。③詩文。④色事。④の意味は、男女の情事、風情、娼婦に関することを指す。しかし、この詩に関する注釈書によると、以上のうちの②と③は当てはまらないと考えられるため、①と④についてのみ考察する。

まず、この詩の「風月」に関して、多くの研究者は前述した①自然の景物と解釈している。この見解を支持する研究者の一人が辛島である。一方で、④男女の情事と解釈するのは、吴柯と吴维杰である。

吴柯、吴维杰『李冶・薛涛・鱼玄机诗集』（中国书店、2017）は、次のように述べている。

清风明月、泛指美好景色。唐吕岩酹江月词「倚天长啸、洞中无限风月。」又指男女情爱之事。前蜀韦庄「多情」诗：「一生风月供惆怅、到处烟花恨别离。」、『醒世恒言・卖油郎独占花魁』：「俞太尉是七十岁的老人家、风月之事、已是没分。」此处似指男女爱情之事。

「清风明月」とは、通常、美しい自然景色を指す表現である。例えば、唐代の呂岩の詞「酹江月」には、「天に倚って長嘯す、洞中 無限の風月」という句があり、ここでの「風月」は美しい自然の情景を描写している。しかし、「風月」はまた、男女の情愛を意味することもある。前蜀の韋莊の詩「多情」には、「一生風月 惆悵に供ふ、到る處 煙花 別離を恨む」という句があり、ここでは男女の愛情を表している。また、『醒世恒言』の「卖油郎独占花魁」には、「俞太尉は七十歳のお年寄りである。（彼には）風月のことがもうない」との記述がある。この詩においても、男女の愛情を指しているようだ。（引用者訳）

そのため、吴柯等は、この詩の起句と承句を「自叹多情的人本来就有太多烦恼、更何况自己的儿女情长之事还混乱不堪呢！」（自分の多情を嘆く人は、もともと色々と悩んでおり、その上さらに自分の男女の情愛のことが混乱しているからなおさらだ）と解釈している。これは、詩人が自己の情愛の混沌を秋の景色と重ね合わせ、自己の内面の葛藤や深い悲哀を表現したと解釈していると考えられる。

ただ、辞書⁵などに見られる用例を分析した結果、魚玄机以前の時代において「風月」が男女間の情愛や関係を示す意味で用いられた例は見当たらない。例えば、杜甫の「吹笛」（全二三一）の

⁵ 本研究においては、以下の辞書を参照した。商務印書館編輯部編、廣東・廣西・湖南・河南辭源修訂組『辭源』（修訂本、商務印書館、1979年7月～1983年12月）、諸橋轍次著『大漢和辞典』修訂版（大修館書店、1986年）、『漢語大詞典』（上海辭書出版社、1986年11月～1993年12月）、戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編『漢辞海』（第三版、三省堂、2015年）、小川環樹・西田太一郎・赤塚忠・阿辻哲次・釜谷武志・木津祐子編『角川新字源』（改訂新版、角川書店、2017年）。

中の「吹笛秋山風月清、誰家巧作斷腸聲」（笛を吹く 秋山 風月の清きに、誰家か巧に作す 断腸の聲。）という句は、「清風明月」という意味の例として『大漢和辞典』（巻一三）に載せられている。これらの辞書に基づいて、時代的文脈と詩語の使用法を考察すると、魚玄機のこの詩における「風月」も、自然景観の表現であり、男女の情事に関する意味ではなかったと思われる。

1. 3. 「洞房」

「洞房」という言葉は、主に二つの意味を持っている。一つ目は、家の奥深いところにある部屋の意味であり、寝室や女性の部屋を指す。二つ目は、特に新婚夫婦の寝室を指す意味である。この詩において「洞房」がどのような意味を持つのか、その文脈と用法を検討する必要がある。

2 楚・宋玉「招魂」：『楚辞』

娉容修態 娉容修態にして
 絢洞房些 洞房を絢ふ

2 は「やさしく美しい宮女たちの姿が、奥深い部屋に満ちている」という表現である。この「洞房」という言葉は、詩だけでなく、漢・司馬相如の「長門賦」（『文選』巻一六）にも用いられている。「長門賦」に「懸明月以自照兮、徂清夜於洞房」（明月懸かりて以て自ら照し、清夜に洞房に徂く。）⁶ とあるのは、寵愛を失った陳皇后が月明かりの下、武帝を夜遅くまで孤独に待ち続けるが、なかなか臨幸されない様子を描写したものである。ここでの「洞房」は、陳皇后の私的な住まい、すなわち彼女の寝室を意味している。

両作品に共通する「洞房」という言葉が使われているが、ともに「洞房」という言葉を用いて、女性のいる部屋を表現しているという共通点があるといえよう。

3 初唐・劉希夷「早春」（全八二）

佳人眠洞房 佳人 洞房に眠る
 回首見垂楊 回首して 垂楊を見る

劉希夷の詩は、「佳人」が「洞房」の中で寝ている様子を描いており、ここでの「洞房」も女性の寝室を指す表現と考えられる。

一方、中唐以降、「洞房」という言葉が新婚の寝室を指す用法で使われることが増え、この意味も徐々に定着していった。

⁶ 小尾郊一著『文選』文章編二（全訳漢文大系 第二十七巻）（集英社、1974）

4 中唐・朱慶餘「近試上張籍水部」(一作閨意獻張水部)(全五一五)

洞房昨夜停紅燭 洞房 昨夜 紅燭を停む
待曉堂前拜舅姑 曉を待って 堂前 舅姑を拜せんとす

この句における「洞房」は、新婚夫婦の寝室を指す。結婚式の夜、夫婦の寝室で赤いろうそくが燃えている様子と、翌朝早くに新婦が起きて夫の両親に挨拶する慣習を描写している。

すなわち、中唐以降、「洞房」は新婚夫婦の寝室としての意味を持つようになった。一方で、新婚夫婦を強調せず、女性の寝室を指す例も引き続き作られている。

5 晩唐・溫庭筠「酒泉子」其一

近來音信兩疎索 近來 音信^{とも}兩に 疎索たり
洞房空寂寞 洞房 空しく寂寞たり

5の例は、「近來 音信^{とも}兩に 疎索たり」という表現から考えて、新婚夫婦の寝室を指すとは解釈しがたい。この詩の「洞房」は、「空」で「寂寞」、つまり空っぽで孤独という状態を表しており、その女性が感じる孤独感や切なさを強調しているといえよう。

魚玄機の「秋怨」(22)における「洞房」を合わせて見ると、これらの詩(詞)は、女性の孤独感や愛する人との別離、寂しさを描くことが中心テーマである。また、この詩の場合、特に新婚という背景がないため、魚玄機の「洞房」も女性(魚玄機)の寝室を指したと考えられる。この見解は多くの研究者によって共有されている。

1. 4. 「更聲」

「更」は古代中国で夜間の時間を区切るための単位で、「更聲」には鐘樓の音の意味と更夫(夜間に時間を知らせる役割を担っていた人)の出す音の意味があり、中国の研究者たちが現代中国語に翻訳する際、「打更的声音」(引用者訳:夜回りをする音)とされることがあるが、これはどちらの意味なのか曖昧であると思われる。

本節では、魚玄機の詩における「更聲」の表現がどちらの音か、すなわち鐘樓の音か更夫の音かについて考察を行う。

唐詩において見られる最古の「更聲」の用例は、杜甫の詩におけるものである。

6 盛唐・杜甫「曉望」(全二三〇)

白帝更聲盡 白帝 更聲盡き

陽臺曙色分　陽臺　曙色分る

下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』（講談社、2016）によると、「更聲」は「夜間、時を告げる太鼓や鐘の音」であり、この句は「白帝城では夜の終わりを告げる太鼓や鐘の音が鳴り終わり、東の陽台では夜明けの色がはっきりとしてきた」と訳されている。この解釈に基づく、この「更聲」は、決まった場所、たとえば鐘楼などから聞こえてくる音と考えられる。

魚玄機の「洞房便與更聲近」（洞房は更聲に近い）という句を考察する際、字面通りに解釈すれば、洞房（寝室）は固定された建築物であり、「更聲」に近いという状態が描写されている。これは、「更聲」が移動する音ではなく、固定された場所から発せられる音であることを示唆している。

この表現から推測するに、夜眠れない魚玄機は、自身の部屋が「更聲」がする場所に近いため、その音を聞いていると考えられる。そして、時間が経過するにつれて、眠れない寂しさが増していく様子が描かれており、「更聲」の描写は、時間が徐々に流れ、夜が深くなる中で、眠れずにいる寂しい詩人の心情を暗示していると思われる。夜の静寂の中で響く鐘の音が、詩人の孤独感や切なさを強調し、その感情を深める効果を持っているのである。

本節では、この詩の中で議論されている、または複数の解釈の可能性のある詩語を分析してきた。その結果をまとめると、次のようになる。詩人は、「多情は深く人に愁いを与えるものである」と嘆いている。特に、目の前の庭に風月が満ちる秋に当たっているため、その感情はより一層強まっている。詩人の寝室が鐘楼と近く、その音がよく聞こえることで、夜ごとに灯りの前で愁いのために白髪になっていく様子が描かれている。

この詩には、多情な心がもてで悲しみを感じることに、特に秋の景色を見るとその感情が強まることが述べられている。これは、文人たちが古くから秋を悲しんできた伝統に由来している。例えば、劉禹錫の「秋詞二首」（全三六五）にある「自古逢秋悲寂寥」（古より秋に逢えば寂寥を悲しむ）という句も、秋が伝統的に悲しみの季節であることを示している。春は生命の始まりを、秋は終わりを象徴し、これらの季節は詩人の感情に深く影響を与える。

魚玄機のこの詩の主題について、彭志宪・张焱著『鱼玄机诗编年译注』（新疆大学出版社、1994）では、「秋天的哀怨。中国古代文学对于秋天或与秋有关事物的描写、总的来说是低沉乃至悲凉的」（引用者訳：秋の愁いである。中国古代文学における秋や秋に関連する事物の描写は、一般的には暗く、さらに悲しいことを示している）と述べられている。

また、前半二句の解釈について、同書では「自我叹息、多情只能增添忧愁。何况正在满院秋风吹、秋月明令人添愁的节候」（引用者訳：自己はため息をつき、多情は憂愁を増すのみである。まして庭いっぱい秋風が吹き、秋の月が人に憂いを与える時節だからなおさらだ）と述べられている。つまり、前半二句においては、詩人が内面的な憂愁を抱えており、秋の風景がその憂いを一層深め

ていることが示されていると思われる。

2. 古典詩に見られる「風月」と「満庭」

「風月満庭」、または「満庭風月」の表現で中国古典詩の検索サイト⁷を調査してみても、魚玄機以前の用例は見当たらず、魚玄機が工夫した詩語と考えられる。ただ、「風月」と「満庭」のそれぞれは、どちらも古典詩においてよく見られる表現である。この節では、一般的な用法を確認していく。

なお、1. 1における「多情」という言葉に対する考察を通じて、起句の「多情」がすでに男女の感情のことを含んでいることを確認した。これは詩全体の感情表現の基礎となっている。したがって、1. 2で検討したように「風月」は、魚玄機以前の用例と同様に、「清風明月」の景色を詠むものであり、その解釈に不都合はないと考えられる。

本節では、「風月」と「満庭」に関する具体例を取り上げ、考察を行う。

2. 1. 「風月」

中国古典詩において、魏晉から明清まで、「風月」は引き続き用いられている。『全唐詩』だけでも、用例は200首ほどある。以下にいくつかの例を挙げる。

7 初唐・盧照鄰「還京贈別」（全四二）

風月清江夜 風月清江の夜
山水白雲朝 山水白雲の朝

8 盛唐・杜甫「日暮」（全二三〇）

風月自清夜 風月 おのづか 自ら清夜
江山非故園 江山 故園に非ず

9 中唐・白居易「哭崔常侍晦叔」（全四五二）

風月共誰賞 風月 誰と共にか賞せん
詩篇共誰吟 詩篇 誰と共にか吟ぜん

⁷ 本文中の資料検索については、ネットデータベースである「寒泉」及び「搜韻」を基に行い、それぞれのデータを原本に当たって確認した。

10 晩唐・許渾「晚自東郭回留一二遊侶」(全五三三)

今夜西齋好風月 今夜の西齋 風月好し
一瓢春酒莫相違 一瓢の春酒 相違ふなし

7 盧照隣の「風月 清江の夜」と8 杜甫の「風月 自ら清夜」は、いずれも夜景における風月、すなわち夜の美しい景色を詠んでいる。また、9 白居易の「風月 誰と共にか賞せん」と10 許渾の「今夜の西齋 風月好し」においても、同様に美しい「風月」の景色が描かれている。

いずれも夜の風景として「風月」が用いられており、前節で確認したように、男女の恋愛を指すものではない。友人との別れを惜しんだり、物は変わらないが人は変わり、かつての情景が今はもうないことを嘆いたり、美しい景色を共有してくれる人がいないことで友人を懐かしんだり、自然の景色を楽しんで出会いを詠ったりと、感情の表現はさまざまである。簡単に言えば、「風月」という詩語は詩人のさまざまな感情表現と密接に結びついた表現といえよう。

2. 2. 「満庭」

次に、「満庭」の用法を確認しておく。

「満庭」という表現は、庭が自然の景物で満たされている様子を表す際に用いられる。

11 中唐・耿漳「許下書情寄張韓二舍人」(全二六九)

繞院綠苔聞雁處 院を^{めぐ}繞る綠苔 雁を聞く處
満庭黃葉閉門時 庭に満つる黃葉 門を閉づる時

12 中唐・白居易「司馬廳獨宿」(全四三三)

荒涼満庭草 荒涼たり 庭に満つる草
偃亞侵檐竹 偃亞たり ^{のき}檐を^{をか}侵す竹

13 中唐・賈島「題興化園亭」(全五七四)

薔薇花落秋風起 薔薇 花落ちて 秋風 起こり
荊棘満庭君始知 荊棘 庭に満ちて 君始めて知る

以上の例からすると、「満庭」という詩語の基本的な用法は、「黄葉」、「草」、「いばら」といった具体的な植物などが庭に満ちることを表現すると考えられる。

魚玄機の詩においても、「満庭」という詩語は「秋怨」(22) 以外にも二首で使用されており、彼女の詩における自然の描写と感情表現の手法として重要な役割を果たしている。

14 冬夜寄温飛卿（14）冬夜、温飛卿に寄す

満庭木葉愁風起 満庭の木葉 風の起こるを愁ひ
透幌紗窗惜月沈 透幌の紗窗 月の沈むを惜しむ

15 重陽阻雨（28） 重陽、雨に阻まる

満庭黄菊籬邊拆 満庭の黄菊 籬邊に拆け
兩朵芙蓉鏡裏開 兩朵の芙蓉 鏡裏に開く

例14と例15に見られる通り、「植物が庭に満ちる」という用法は、魚玄機にも受け継がれている。そして、単に自然の風景を描写するだけでなく、木の葉が風に煽られるさまは、詩人の内面の愁いや動揺を象徴しており、黄菊が籬の傍に生い茂る情景は、詩人の孤独感や秋の終わりを感じさせる寂寥感を映し出している。

このように、魚玄機は以前の詩人と同様に、「満庭」という言葉を通じて、季節の移ろいと共に変化する内面の情感を繊細に表現していると考えられる。

なお、「院」の字もまた、庭を意味するために用いられることがあるため、「満院」という表現についても調査を行ってみた。しかし、「風月」「風」「月」に続く「満院」という表現の例は存在しない。一方で、「花満院」という表現の例が一例見つかった。

16 盛唐・王昌齡「題僧房」（全一四三）

櫻欄花満院 櫻欄^{しゅうろ} 花 院に満ちて
苔蘚入閑房 苔蘚 閑房に入る

これは、庭が花で溢れている様子を表現しており、「満庭」の「植物が庭に満ちる」と同じ用法であるため、「満院」に関する具体的な例示や詳細な分析については、省略することとする。

3. 古典詩における「月満庭」

本節では、「風月満庭」に先行する表現について考察する。「風満庭」「風月満庭」という表現の例は見当たらないが、「月満庭」の例は存在するので、次に、『全唐詩』におけるこの詩語の使用例を具体的に検討する。

「月満庭」は「月の光が庭に満ちる」という意味で、古典詩において頻繁に用いられる表現である。このフレーズは、杜甫の「倦夜」という詩において初めて見られるものである。

17 盛唐・杜甫「倦夜」（全二二七）

竹涼侵臥内　竹涼　臥内を侵し
野月満庭隅　野月　庭隅に満つ

18 中唐・盧殷「月夜」（全四七〇）

露下涼生簾　露下　涼　簾に生じ
無人月満庭　無人　月　庭に満つ

19 中唐・白居易「題香山新經堂招僧」（全四五八）

燈満秋堂月満庭　燈は秋堂に満ちて　月は庭に満ち
香花漠漠磬泠泠　香花　漠漠として　磬　泠泠たり

20 中唐・元稹「憶事」（全四二二）

明月満庭池水淥　明月　庭に満ちて　池水　淥なり
桐花垂在翠簾前　桐花　垂れて　翠簾の前に在り

以上の例と2. 2での考察を総合すると、「満庭」という詩語の用法には、主に二つのパターンが存在することが明らかとなった。一つ目は、2. 2で挙げた、具体的な形のある木や花、葉が庭一面に満ちる様子を表現するものであり、二つ目は、本節で挙げた、具体的な形を持たない月の光が庭いっぱいに満ちることを表すものである。17から20の例の「野月」、「明月」、「月」などは、すべてこの後者の「月の光が庭に満ちる」意味で用いられている。

月の光がどこかに満ちることを示す場合、「満」という字の他に「盈」という字も使用されることがある。南朝宋の何承天の「鼓吹鏡歌十五首」⁸ 其九「芳樹篇」に「皓月盈素景、涼風拂中閨」（皓月　素景に盈ち、涼風　中閨を拂ふ）という句が見られる。これは冬に作られた詩で、「素景」とは白い景色を意味し、その中に明るい月の光が満ち溢れ、閨房に涼しい風が吹き渡る様子を描いている。

しかし、庭に満ちるという文脈では、「盈」という字を使用する例は見つからなかった。「盈」は、「杯に酒が満たされる」といった表現に類出する文字で、ある空間を満たす形容においては、「満」という字が用いられるのが通例のようである。

4. 古典詩に見られる「風」「月」「満」「場所」を用いる表現

先述のように、魚玄機の作品以前に、「風月満庭」という表現が用いられた例は見当たらないが、

⁸ 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（宋詩卷四）（中華書局、1983）

類似の構造を持つ表現は存在する。本節では、これらの表現について考察を行っておく。

21 中唐・白居易「同錢員外禁中夜直」(全四三七)

宮漏三聲知半夜 宮漏 三聲 半夜を知る
好風涼月満松筠 好風 涼月 松筠に満つ

22 中唐・白居易「獨眠吟二首」(其二)(全四四一)

就中今夜最愁人 就中 今夜最も人を愁へしむ
涼月清風満牀席 涼月 清風 牀席に満つ

例21は「心地良い風と涼しげな月光が松や竹に満ちて、実にすばらしい」という意味である。良い風と涼しい月が松や竹を満たす情景を描き、自然の中の特定の植物を通して風と月の美しさを詠じている。

例22は「涼やかな月光とすがすがしい夜風が寝台の中まで一杯入ってきて、とりわけ今夜は、最も私をやるせなくさせる」の意味である。後の句は、涼しい月と清らかな風が屋内の床や席を満たす様子を表しており、人間の生活空間に自然の清涼さが染み渡る風景を描出している。前の句は、良い風や涼しい月があるにもかかわらず、それを見てくれる人がいないため、最も人を悩ませるといふ詩人の意を表しているのであろう。この表現は、美しい自然が提供する慰めや喜びを共有できる相手がいない孤独感を強調し、その孤独が詩人にとって大きな憂いとなっていることを示唆している。

また、謝翱の作品の中には、「風」「月」「満庭」という三つの要素が同じ句に登場する例が存在する。

23 謝翱「詩」(全八六六)⁹

半夜香風満庭月 半夜の香風 庭に満つる月
花前空賦別離詩 花前 空しく賦す 別離の詩

この句は、「夜中によい香りのする風が吹き、月の光が庭を満たし、花の前で空しく別れの詩を書いている。」という意味である。ここでは、時間(夜半)、風の特徴(香る風)、そして月光が庭を照らす様子が具体的に描かれている。この表現は、夜の静寂の中で感じられる自然の美しさや風

⁹ この詩は、謝翱と金車美人の間で交わされた贈答詩で、具体的な時代は不明であるが、晩唐の志怪小説集『宣室志』に収録されていることから、晩唐以前の作品であると推測される。

の香り、月光の明るさに焦点を当て、詩人の感受性や静かな夜の雰囲気を表現している。

以上のように、魚玄機以前に「風月満庭」という表現は存在しなかったが、風と月の光が特定の場所（物体）を満たす様子を詩に書いた例はあった。

しかし、魚玄機以前のこのような表現を魚玄機の「風月満庭」の句と比較すると、二つの点が注目される。第一に、「風」と「月」がまだそれぞれ単独の描写対象として扱われており、一つの詩語「風月」として組み合わせられていないという点である。第二に、充滿する対象としての「松筠」（松と竹）や「床席」（寝台）などはより限定的な空間であり、「庭」という広がりを持つ場所を表す詩語とは異なるという点である。

この「風月満庭」という詩的表現が持つ斬新さについては、次節で検討していく。

5. 魚玄機の「風月満庭」の斬新さ

本稿ではこれまで、「風月」、「満庭」という詩的表現、並びに「風」や「月」が存在する場所が満たされているという表現についての考察を進めてきた。以上の四節の論述を基盤として、本節では魚玄機の「風月満庭」という詩的表現における独自の工夫について検討を深める。

2. 1においては、「風月」という言葉が、頻繁に用いられる詩語であることを確認した。これは、「清風明月」という意味で、素晴らしい自然の景色を意味している。詩人たちは詩の中で、この美しい景色をどのように楽しむかについて述べており、例えば、9 白居易は「この美しい景色を誰と共に楽しめばよいか」と詠み、10 許渾は「今宵の西斎の美しい風月」と詠んでいた。

このように、「風」と「月」は秋の景色を代表する要素であり、その景色自体でもある。これらは楽しむ対象として鑑賞される価値があり、詩人の感情を引き起こす効果も持っているため、詩において常に重要な位置を占めてきた。

続く2. 3では、魚玄機が「満庭」という表現を継承し、「黄葉が庭に満ちる」などと詠んでいる点を確認した。しかし、「秋怨」(22)において、魚玄機は「風月」という詩語を「満庭」と共に用いていた。これは彼女の創造性を示すものであろう。

さらに、3で行った「月満庭」に関する考察に基づき、4では、魚玄機以前から「風」と「月」（月の光）がその空間（または物体）に満ちる様子が映じられたことについて述べた。魚玄機はこれまでの「風」と「月」の表現に基づいて、「風月」という言葉を使用し、「風」と「月の光」という二つの意味を持たせたと考えられる。「況當風月満庭秋」（況んや 風月満庭の秋に 當たるをや）という句全体について考察すると、景物描写を通して庭に満ちる秋の物寂しい雰囲気を描写していると思われる。

以上の結論を踏まえると、魚玄機の「風月満庭」という表現は、彼女の前に存在した詩人たちの様々な描写法を引き継ぎつつ、さらに独自の工夫を加えていることがわかる。植物のような具体的

なものが庭に満ちる描写や、月光のような形のないものが庭に満ちる描写が行われてきた中で、魚玄機は「風月」の語を用いることにより、月光だけではなく風も描写対象として取り入れることになった。

月光とは異なり、風は直接見えないが、その存在は感じられる。魚玄機は、視覚的な詩語と触覚的な詩語を組み合わせることで、より豊かな表現を生み出しているのである。また、「風」は動的なイメージを、「月の光」は静的なイメージを持ち、両者の組み合わせによって、静的な描写と動的な描写が融合している。

そして、「風月満庭」の「満」という文字は、庭全体に風と月が満ち溢れ、視覚的にも感覚的にも広がりを感じさせる。この表現は、風景だけでなく、詩人の内面的な感情や自然との融合感を強調している。それまでの「月」のみでなく、「風月」と表現することによって、「風」と「月」が庭全体を満たし、詩人の内なる感情が自然に広がる様子が描かれるようになり、より壮大で豊かな情景を描き出すことになったといえよう。

すなわち、「風月満庭」という表現は、魚玄機の詩における自然の美しさと感情の象徴であり、「風」と「月」が庭に満ちている様子を描いたところには、魚玄機の表現の斬新さが見られるのである。

また、「況んや 風月満庭の秋に 當たるをや」という詩句全体をみると、風と月が庭を満たす秋の情景が捉えられており、季節感に焦点を当てた表現になっている。ここには、秋の到来とともに感じられる風の涼しさと月の明るさが表現されており、季節の移ろいに対する詩人の感受性の豊かさが窺える。

以上をまとめると、「風月満庭」という表現において、魚玄機は自然の要素を巧みに用いて、詩人自身の感情を表現しており、「風」と「月」という二つの自然要素を組み合わせることで、彼女は静と動、見えるものと見えないもの、触覚的な存在と視覚的な存在の融合を生み出している。このようなことが、彼女の表現の斬新な点だと思われる。

6. 魚玄機以降の「風月満庭」と関連する表現

前節では、「風月満庭」という表現がいかに生み出されたかについての考察を行った。本節では、魚玄機によって確立されたこの詩的表現が、彼女の後の詩人たちにどのように受け継がれ、発展していったかについて述べる。

魚玄機より少し後の時代の韋莊には、「満庭風雨」という似た構造の表現が見られる。まずはこの例を確認することから始める。

24 唐末至五代・韋莊「南省伴直」（全六九八）

何事愛留詩客宿	なにごと 何事ぞ やど 詩客の とど 宿るを留むるを愛する
満庭風雨竹蕭騷	満庭の風雨 竹 せうさう 蕭騷たり

この表現は、庭一面に風雨が吹き荒れる様を直接的に描写している。この表現に「竹 蕭騒たり」という句を加えることで、荒れ狂う天候とその中で騒がしく鳴る竹の音が一体となり、より動的な風景を表現する効果を生み出している。

一方、魚玄機の使用する「風月満庭」という詩句は、風と月が庭を満たす、より穏やかで風流な情景を描く。ここで言う「風月」は、自然界の優美さを指し、特に秋に見られる月明かりの静謐さと夜風の動きは、詩人の情緒の豊かさや深い感慨を呼び起こす。この詩句は、静と動を組み合わせた情景を通して、詩人の複雑な心情を表現し、その結果として読者に深い印象を与えると思われる。

このように、「満庭風雨」と「風月満庭」という詩句は、前者は比較的荒涼とした心象風景を、後者は和やかな詩情をそれぞれ描出している。これらの表現の差異は、古典詩における自然描写が持つ多様な象徴性と、詩人の精緻な情感表現の技巧を明確に示している。

その後、宋代以後になると、魚玄機の「風月満庭」を直接受け継いだと思われる表現も見られるようになる。

25 宋・徐鹿卿「酬曾教正」（『清正存稿』卷六）

頼有濂溪衣鉢在 頼^{さいは}ひに 濂溪 衣鉢の在る有り
満庭風月浩無邊 満庭の風月 浩^{ひろ}くして無邊

26 元・安軸「同使上妓謠」其四（「燕尋玉京」『謹齋集』卷二）

相對知心不知語 相對して 心を知るも 語を知らず
一庭風月落花時 一庭の風月 落花の時

27 明・王恭「月夜有懷同志」（『草澤狂歌』卷四）

幾度相思孤枕夢 幾度^{いくたび}か相思する 孤枕^{こちん}の夢
満庭風月不勝情 満庭の風月 情に勝へず

28 明・王漸逵「山中秋夜感興」（其三）（『青蘿文集』）

閒陪無極翁遲坐 閒^{しづ}かに 無極翁^{むごく}に陪して遅く坐り
風月満庭花正香 風月 庭に満ちて 花 正に香る

29 清・錢大昕「祝芷塘編修屬題接葉亭唱和詩卷」（『潛研堂文集』卷一）

一庭風月樹數株 一庭の風月 樹 數株
 不道門前塵堀堞 道はず 門前に塵 堀堞^{くつか}たりと

以上の例から、「風月満庭」という表現の展開が明らかとなる。最初に魚玄機が「風月満庭」という表現を創出し、その後宋代になると、平仄の関係で「風月」と「満庭」を入れ替えたと思われる「満庭風月」という表現も生まれたことが見て取れる。さらに、元の時代になると、同様の意味を持つ「一庭風月」という表現も登場している。これらの表現は、清代に至るまで使われ続けたのである。

この流れは、魚玄機の創造した詩的表現が、後の時代においてどのように展開していったかを示している。宋代の詩人たちは、魚玄機の表現を受け継ぎつつ、それをさらに拡張し、深化させた。これは、詩語としての「風月満庭」が、時代を超えて詩人たちによって異なる文脈や視点で捉えられ、使われ続けたことを意味していよう。

前節で述べたように、「風月満庭」の「満」という文字は、庭全体に風と月が満ち溢れ、視覚的にも感覚的にも広がりを感じさせた。これに対して「一庭風月」は、「一」という文字が強調する通り、限られた空間での繊細な美しさを表現する。「風月満庭」も「一庭風月」も、古典詩が重視する風景と感情の融合を継承しているが、それぞれが異なる美の側面を強調しているだろう。

以上のように、魚玄機の「風月満庭」は、広がり豊かさを持つ詩語として、後代の古典詩において影響を与えた。詩人たちは、この表現を基にしながら、より精緻で個人的な感情を表現するために「一庭風月」のような表現を発展させた。このような表現の展開は、魚玄機が生み出した「風月満庭」という表現が詩歌において新たな活力を持ち続け、さらなる新しい表現を生み出していることを示していると思われる。

おわりに

以上、本稿では、「風月満庭」に関連する前の時代と同時代の詩詞における用例を検討して、この表現が生み出された経緯について考察してきた。そして、魚玄機が詩語を選択する上で工夫した点と後の時代の詩詞に与えた影響について論じてみた。これらをまとめると、以下のようになろう。

1 (魚玄機「秋怨」(22)の解釈)では、「多情」「風月」「洞房」「更聲」の詩語の考察を通じて、魚玄機の「秋怨」(22)という詩の意味を確認した。この詩の「多情」という詩語は、中晩唐で定着した用法と同じく、感情豊かな人は外界に感じやすいという意味で、愁いを表現した文の中に使われている。部屋に鐘楼の音が聞こえることを描写することで、一睡もできない詩人が、鐘楼の音に時間の流れを感じ、ますます愁いや寂しさを増していくさまを表現している。

2 (古典詩に見られる「風月」と「満庭」)では、「風月」と「満庭」の語について考察することで、それぞれの意味と用法を確認した。「風月」は常用される詩語ではあるが、魚玄機の「風月」と「満庭」の組み合わせは前例が見えない用法である。

3 (古典詩における「月満庭」)では、2. 2で検討した形のある「植物」等+「満庭」の他に、形のない「月」(月の光)+「満庭」の用法を確認した。このような表現はすでに「風月満庭」の表

現と近づいてきたといえるだろう。

4（古典詩に見られる「風」「月」「満」「場所」を用いる表現）では、「風」と「月」がある場所を満たす描写について考察した。「風月満庭」という表現は、魚玄機以前にはなかったが、当時の詩人たちは、「風」と「月」を二つの代表的な景物として、ある場所に満ちることを描写していたことがわかった。

5（魚玄機の「風月満庭」にの斬新さ）では、魚玄機の詩の中の「満庭」と「風月満庭」の分析によって、魚玄機が先人の用法を受け継ぎながら、どのような工夫を加えているのかについて考察した。そして、「形のあるものが庭に満ちる」という表現と比べると、「風月満庭」は、動的な詩語と静的な詩語、および視覚的な詩語と触覚的な詩語を結合して用い、より印象的な詩語となっていることを指摘した。これは魚玄機が詩語を選択する上で工夫した点であると考えられる。

6（魚玄機以降の「風月満庭」と関連する表現）の考察では、魚玄機より少し後の時代には、「満庭風雨」という表現が見られ、宋代以降、「満庭」或いは「一庭」の「風月」という表現が多く、詩（詞）人に用いられていることを指摘した。魚玄機の「風月満庭」という詩的表現が後の時代の詩詞に影響を与えていたことがわかった。

このように本稿では、六つの節の考察を通して、魚玄機の詩的表現の「風月満庭」の工夫と位置付けを確認し、詩人としての魚玄機の独自性を見ることができた。

「風月満庭」という表現は、古典詩において独特の美感を持っている。まず、この表現は自然描写と詩人の感情の融合を示し、「風」と「月」といった自然の要素を通じて、詩人の心情や精神状態を巧みに描き出している。「満庭」という表現により、「風」と「月」が庭全体に広がり、視覚的な広がりを感じさせるだけでなく、詩人が自然と一体となった感覚を想起させる。

さらに、「風月満庭」には動と静の調和が見られる。「風」は動的であり、庭の草花を揺らし変化をもたらす一方で、「月」は静的な存在として夜空に浮かび、穏やかな光を放っている。この動と静の対比は詩人の内面的な動揺と静けさへの憧れ、あるいは感情の起伏と心の平穏の両立を表している可能性があるのではないと思われる。詩人は、動と静が織り成す風景を描写することで、内面の感情を表現していると推測できよう。

以上のように、「風月満庭」は、自然描写を通じて詩人の感情を表現し、動静の調和や空間的な広がりを持った表現であると思われる。

本稿で取り上げたのは、「風月満庭」という一つの詩的表現にすぎない。これからも魚玄機の詩に見られる月にまつわる詩語についてきめ細かい考察を進めたい。それを進めていくことによって、詩人としての魚玄機がどのような工夫をし、斬新な詩的表現を生み出したかという点を解明し、その詩語の発展してきた経緯を明らかにすることが可能になるのではないと思われる。

<参考文献>

- 辛島驍著『漢詩大系 15 魚玄機・薛濤』（集英社、1964）
- 小尾郊一著『文選』文章編二（全訳漢文大系 第二十七卷）（集英社、1974）
- 逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（宋詩卷四）（中華書局、1983）
- 陈文华校注『唐女诗人集三种』（上海古籍出版社、1984）
- 松浦友久『中国詩歌原論—比較詩学の主題に即して』「中国古典詩における春秋と夏冬」（大修館書店、1986）
- 佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店、1992）
- 彭志宪・张焱著『鱼玄机诗编年译注』（新疆大学出版社、1994）
- 下定雅弘・松原朗『杜甫全詩訳注』（講談社、2016）
- 吴柯・吴维杰补注『李冶・薛濤・鱼玄机诗集』（中国书店、2017）
- 岡村繁『白氏文集』新釈漢文大系（明治書院、1988—2018）